

2004.8.15

生田豊明さんと偲ぶ

日本エネルギー経済研究所

生田さんの思い出



森 一久
もり かずひさ

水素の積極利用を

生田豊朗さんの御急逝は、小生にとって、二重の意味で大きなショックであった。というのは、容易でないあの御病氣をご家族共々のご努力で克服され、半年前頃から、俄に電話を頂く回数が増えていた。最初は快方に向かわれる状況のお知らせであったのが、順次原子力の問題点の指摘から、取り組みの具体的な御提案に発展していた。

そして、御計報の一カ月前だったと記憶するが、自分はいよいよ普通に出られそうだから「原子炉多目的利用委員会（生田さんが座長）で、原子力の発電以外の熱利用、特に水素の生産・利用の促進の検討を急ぎませんか」と強くすすめられた。

原子炉での水素生産とその利用は、その技術的な可能性はつとに周知のところであり、問題は原子力技術者と利用者（産業）との呼吸をどう合わせるかであり、原産が見識広い生田さんに座長をお願いしていた理由でもあった。

我々が早速その準備に取りかかった矢先の、ご逝去のお知らせであった。ブッシュ米大統領が、水素利用を大きく取り上げ、日本でもその検討が俄に勢いづいてきた今、生田さんの高い先見性に思いをはせつつ、ここに思い出を書くことの深いご縁を感じる。

嵐の中の科技庁

生田さんとお付き合いは、「剛

腕」を自負する森山欽司氏が科技術庁に、大臣・原子力委員長として就任した時、（特に請われて）原子力局次長に就任された昭和四十八年以来である。早速始まった同大臣の怒声と暴投、それに起因する「事件」への対応や処理は、以前から同大臣とは写真業関連の仕事等で旧知の間であった生田さんといえども、並大抵の事ではなかった。

比較的新しい役所だった科学技術庁が初めて出会ったこの「台風」の中、個性の強い大臣に仕えるという初めての事態を、生田さんの采配で何とか乗り切ることができて、同庁職員も貴重な体験を得て、一息ついたのであった。

その「事件」とは、原子力船「むつ」をめぐる漁業者との対立、分析化学研のデータ捏造事件、田島英三委員や有澤廣巳原産会長との正面衝突等々、僅か一年余りの間に、新聞のトップとなった出来事の連続であった。

生田さんから私にいただいた、その都度の貴重な御示唆、相談、情報



1975(昭50)年1月

天下晴れて退官の日

交換は、殆ど連日であった。その一つ一つのドラマや内幕を明かすことは、生田さんの、当時の想像を絶するご苦労を具体的に紹介することになり、また筆者自身が濡れ衣を着せられる場面もあったので、ここにぶちまけたいという誘惑にも駆られる。しかし、少しでも書けば、それはすでに故人である森山氏を「欠席裁判」にかける事になり、それは私の潔しとしないところ、割愛とする。

原子力のルネサンスを望まれて

生田さんは翌年原子力局長に昇任されたが、同庁の在任は僅か二年であった。次いでエネルギー分野の数々の要職を歴任され、石油危機後

の諸政策で大きな寄与を続けられたわけであるが、その後も一貫して、原子力開発の正常な発展に格別の関心と貢献を続けられた。そして、科技庁にも深い関心と愛情を持ち続けられた。同庁が今、「文部科学省」と合併を余儀なくされ、最近では原子力への取り組みも消極化しつつある。

おそらく生田さんからみれば、「あの時」の苦労を思い起こし、もっと頑張つてほしかったと、齒がゆい思いをされたことであろう。超長期プロジェクトの原子力開発の中核として発足したはずの、その初心の復活を、生田さんは、今も強く望んでおられるに違いない。

(現(社)日本原子力産業会議・副会長)

生田さんを偲んで



とよだしゅういちろう
豊田章一郎

生田さんと私は、共に大正十四年生まれの同い年でした。そして、共に

の経営者に近いものを感じさせる方でした。

に大正十四年牛年生まれの人たちの親睦会である「奇牛会」のメンバーでもありました。その会の行事を通じて、時々ゴルフを楽しんだり、食事をご一緒したりといったおつきあいをさせていただきました。

お人柄の印象は、いわゆる「官僚」というイメージではなく、民間企業

実際、日本エネルギー経済研究所でのお仕事振りを拝見しても、川下のエネルギー・ユーザーである我々のような自動車産業や、そのまた先の一般ユーザー(お客様、消費者)の視点を常に忘れない、バランス感覚のすぐれたものでした。そして、それこそが生田さんのリーダーシッ